

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会
事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

第46回北海道博物館大会 特別講演要旨

7月19・20日、函館市で開催された北海道博物館大会でお話しをいただいた、特定非営利活動法人つなぐ理事長山本育夫氏による特別講演「博物館の底力」の要旨を紹介させていただきます。

私は、今から15年くらい前に公務員を辞めて、全国のミュージアムを紹介するドームという雑誌の編集長をやってきた。15年間、全国のミュージアムがちょうど大きく変貌・変革をするまっ只中に取材をずっと続けてきことになる。

学芸員が観客の立場にたつということはなかなか難しい。私達が、NPOを作った一番大きな原因はそこにある。外から公的な機関に働きかけて、ちょっと嫌みな存在になるけれども、「本当に開かれているの?」、「本当に観客の目線にたっていますか?」、ということをいろんな形でアピールする、そういうものを私達はつなぐNPOという名前で5年くらい前に立ち上げた。

現在の博物館をとりまく状況は、観客にとってミュージアムとはなんだったのかということについてミュージアム側が反省を強いられる非常にいい機会と受けとめるべきだと思う。

一方的な行政評価で、切られてはたらたまらない、ミュージアムは普通の行政評価だけで判断されたら困るということで、私達も観客の立場から評価する方法が必要なんじゃないかと考えた。

そのチェック項目をまとめたのがミュージアムの通信簿。基本的には記述式で、観客の皆さんが出してくれた評価項目を沢山並べて文章で書いてもらう。五段階評価ではなく記述式だから良い所もあるし、悪い所もあるというような評価もある。愛をもって評価して下さと呼びかけている。良くない所・足りない所・欠けている所は批判するけれど、それは改善するための批判として評価し、いい所はうんと誉めて、その美術館・博物館とスタッフの皆さんをねぎらいたいと思う。

つなぐNPOでは、その施設を利用する観客それぞれの個人的体験に基づいて、評価をしたいと思う。美術館などで写真を撮ってもいいですよと言われても観客の皆さんは撮影禁止で今まで怒られているから、その意識・体質を変えるまで時間がかかる。そういう意味では、博物館が本気になって観客をいい意味で変えて、もうちょっと自由な気持ちを抱かせない限りは、お客さんが戻って来ることはないと思う。

この通信簿では、お客さんにそういう体験をしてもらう。つまりお客さん自身も育ててもらいたい。それから、館の魅力も知ってもらいたい。けれども、同時に美術館・博物館のまずい所も悪い所も、ちゃんとチェックしてもらいたいという、大変欲張りな通信簿になっている。

ミュージアム通信簿の他にも、いろいろなガイドブックも作っている。今日の本題の方に入るが、まだ開館前の山梨県立博物館から私達にオファーが来て博物館のコレクションのゆかりの場所を歩くツアーを一緒にやった。

その後、いろいろな自治体からオファーがきて、5年間で100冊のガイドブックを作りツアーを実施している。ツアーで取材する度に地域がみるみる綺麗になって、雑草が生えているような神社でも、綺麗になっていく。町の方達が、自発的に綺麗にしてくれる。そういった効果が生み出されている。県内のバスツアーもやっている。なんでもないような町を歩くというツアーにお客さんが来るだろうかと言われたけれど、大変なお客さんが来ている。ぜひ、皆さんもやってみられたらどうかと思う。観光資源にもなるし、経済効果もある。

こうやって自分の町をまず歩いてもらうと見えてくる姿がある。そしてそのツアーが実はミュージアムなので、ツアーでミュージアムの楽しみ方を勉強していただく。博物館にいきなり連れてこようとするので、昔の資料とか歴史とか博物館で学ぶようなことは実に面白いのだということを経験してもらって、博物館に来てもらえばいい。そして、博物館に行って勉強しようという観客が育って行くのではないかと考えている。

(文責 事務局 小林孝二)

「新しい時代の博物館制度の在り方について」(平成19年6月)がホームページ上で公表されています。博物館大会における特別報告にもありましたように、この報告に関して会員各位の積極的なご意見をお寄せ下さい。宛先:日本博物館協会 (E-mail:webmaster@j-muse.or.jp)

見せる博物館・考える博物館

この2007年6月から北海道開拓記念館の館長をお引き受けして、北海道博物館協会のお仲間に入れていただいた。北海道大学や放送大学の教授や学長として教育と研究の場で半世紀以上も働いてきたから、博物館という少し違うところにやってきた。未だ、博物館長としての慣熟調整のさなかであるので、一人前の口をきく見識も力量もまだない。世の中には当て職という慣習があり、事務局を開拓記念館が担当しているので会長をお引き受けすることになった。博物館に関しての経験は、北海道大学博物館を北大総長の時代に全力を傾けて計画し、理学部本館を転用して北大の長年の宿願の上に苦心して創ったことが唯一のものである。放送大学長として一定の単位(20単位ぐらい)を体系的に学ぶとある分野の修学を認証(Certificate)する制度を作った。その中に、博物館学についてのカテゴリーがあり、芸術系、歴史系の認証制度がすでに発足し、自然史系が開講される予定になっている。NPOのボランティアの方々などがたくさん勉強して認証を受けている。

この博物館の運営責任者をお引き受けする話があった折に、副知事のAさんが、指定管理者制度というものを検討する動きがありますということをお話してくれた。その折は、知識皆無の状況の中であり、そういうことが現代の様々な構造改革の中で論じられているのかなど記憶にとどめた程度のことであった。今でも未だ充分に理解があるわけではないが、どうも博物館の経営と運用の本質に関わることが含まれているのではないかと思うようになった。

小生が北海道大学の総長をしていた折に、当時の有馬文部大臣が国立大学の全学長を代々木のオリンピック記念センターに集めて、国立大学の法人化を進めたいと口火を切った。公務員型の法人で公務員としての身分は変わらない国立大学法人であるということであった。国立大学協会の中の理事会、学長会議で長い激しい議論があった。有馬文部大臣の公務員としてとどまれるという発言は、教職員、なかんずく組合系の職員や公務員指向型の職員に対する配慮であったように思う。法人化のメリットを考えた学長たちは、概算要求で学部長や事務方(各部局単位で)が本省の課長補佐や係長レベルと部門ごとに細目の議論を積み上げたものが大学の計画となるという縦割りでは大学が世界に伍していくことはできず、学長のイニ

シアタイプでまとめた中長期の基本計画の下での大学運営が可能であれば、法人化した方が大学はよくなると考えた。公務員では行動の自由に制限がありすぎるという研究型の大学の意見と、地方大学は国立でなければ十全の機能を発揮できず、地方自治体の多くは高等教育に十分な経験もないとの議論が二項対立的に激しかった。考え確かめ教育する大学の本質に関わる議論であった。

振り返ってこの議論の流れを博物館に働く今の身に援用してみよう。博物館と大学は目的がいささか異なるが、専門性のある高等学習機関としての役割は似たようなものである。大学院大学と地域の短大の中身は大きく異なるが、高等教育機関としての精神に違いはない。博物館も国立民族学博物館のような研究機関型を取るものあり、東京や九州の国立博物館のように見せることに研究をしっかりと加えたものあり、見せることを主体としたものありさまである。最後尾のものは、設立時にはかなりの議論をしてその時代としては立派な博物館であったのに、学芸員や館の日々の研究・調査・収集活動が低調であったり、設置者(県や市、首長部局や教育委員会)の理解・認識がおざなりで管理が通り一遍で予算執行が弾力性のない一般事務系並の運用であったりして、日を経るにつれ活力のない遊休施設と化す例が少なくない。博物館をただの見せる施設と考え、考える機能を過小に評価したり、あるいは首長さんに考える組織としての理解と評価が無い場合に起こりがちである。このところ元気のよい旭山動物園が、何を考え、どの様に行動し、来館者がどう反応したかなどの経緯についても注目したい。

博物館は、学芸員、館のボランティア、そして来館者が発展を支え、事務組織の献身をえて継続する組織である。その為には金がある。金額の大小・多寡ももちろん大切であるが、使い勝手の自由度がもっと大切である。予算をできるだけ柔軟に考え考え使い回していくことがどうしても必要である。博物館にとって自由に使える寄付金の受け入れが不可欠であり、世界の常識である。博物館は大学法人に次ぐ「考えることが見せることの前提」の組織である。この博物館にきて日が浅いが、どうもそのようにはなっていないように思える。指定管理者制度は見せることだけを主体にした、構造改革体制であるのかもしれない。見せることと、自ら考えることの折り合いを、予算面・運用面でどのようにとっていくのかを本当に考えないと、投資がゴーストタウンに向う一里塚になりかねない。

(丹保憲仁、北海道開拓記念館館長)

道東3管内
News

「石炭基礎講座－掘るだけでは終わらない－」を開講して

釧路市には、日本で唯一の坑内掘り炭鉱があります。市民坑内見学会が年1回行われていますが、もっと総合的に石炭産業を知る機会を設けることができないかと考えました。そこで、今年度からの試みとして4回の「石炭基礎講座」を開講しました。サブタイトルは「掘るだけでは終わらない」。

第1回は「選ぶ」。坑内からの石炭（原炭）から、ズリを取り除かなくては売り物になりません。これまで一般に公開されたことがなかった選炭工場の内部を、炭鉱マンの解説で見学しました。また半世紀、選炭ひと筋で働いてこられた方から、「戦後くしろ選炭工場史」をお話いただきました。（6月23日）

第2回は「運ぶ」。石炭は、需要先へ運ばなくては単なる「黒い石」ともいえます。そこで、石炭を港まで運ぶ鉄道を見学しました。鉄道会社の方とともに、愛好団体「釧路臨港鉄道の会」のみなさんにも解説者としておいいただき、安全で効率的な石炭輸送を学びました。現場の方々の“普段着”の対応が好評でした。（7月28日）

第3回は「使う」。日本の電力のおよそ4分の1は石炭火力発電所によります。地元の製紙工場では、発電所やボイラーで石炭が使われています。環境に配慮した石炭利用と、紙のリサイクルについても学びました。（8月17日）

第4回は「住まう」。釧路市内には1970年に閉山した雄別炭鉱があり、貴重な「炭鉱遺産」となっています。いまや無人で森に戻りつつあるこの地にも、およそ3000人の炭鉱マンとその家族、1万人の生活が、37年前まであったのです。雄別炭鉱で働いていた方と、研究・保全活動に取り組んでいる方に、炭鉱全盛期の詳細な地図を片手に、かつての炭鉱集落の生活に思いを馳せました。（10月27日）

4回とも「皆勤」の方、また市内だけでなく、根室や十勝、札幌、遠くは東京や福岡からも参加があったことは驚きとともに、大変うれしく思いました。皆さん笑顔でお帰りになり、この試みはまずは成功したのかなと思っています。

その成功は、多くの方々に支えられたものです。炭鉱・鉄道・製紙会社と現場の方々、そして市民グループや個人、その石炭に対する「燃える」思いです。参加者から「来年度もぜひ」というご意見も頂きました。目下、今後の展開を考えているところです。

（釧路市立博物館 石川孝織）

網走管内
News

網走管内博物館連絡協議会 平成19年度研修報告

網走管内博物館連絡協議会の今年度の総括研修は6月17日北見市の北網圏北見文化センター、個別研修が6月26日網走市の北海道立北方民族博物館で開催された。

北網圏北見文化センターの総括研修では、講演と特別展のギャラリーツアーを行ない、博物館関係者や一般美術愛好者など111名が参加した。

講演は「名画の楽しみ～バロックから近代へ～」と題して、前日より開催されている企画展「ヨーロッパ絵画展～天使がいた時代～」展における講演会「アートカレッジ」の一環として、本展覧会の監修者でもある成城大学教授千足伸行氏から、西洋美術史の中でのバロック絵画の位置づけなど、展示作品の解説をとおして話を伺った。

作品は16世紀末から18世紀初めまでのバロック美術で、古典様式を確立したルネッサンス美術に続くもので、非古典的で劇的で感動に満ちた様式が特徴。また、作品テーマも神話、宗教にこだわらない鷹揚なものも多く取り上げられるようになり、版画などの印刷技術

の発展により、庶民が美術をより身近に感じられるようになった時代でもある。時代を代表する巨星はいないが、キラ星のような多くの作家を生み出している。

西洋美術を鑑賞する上で、バロック美術を理解することは重要で、ルネッサンスの巨匠や近代作家に埋もれがちな美術を紹介し、地域の美術愛好家の知的要望に応えることで文化レベルの向上にも繋がり、本研修が非常に有意義であった。

北海道立北方民族博物館で開催された個別研修は、「海外の博物館、交流に学ぶ～地方博物館に活かせる事例紹介～」と題して、北海道開拓記念館移動博物館・北方民族博物館企画展「カナデアン・ロッキーと大平原のくに」に合わせての開催で、博物館関係者等20名が参加した。

内容は、アメリカ・サンディエゴへの在外派遣研修、北欧、サハリン、アルバータの博物館との交流などの事例報告をとおして、海外との交流で得られた成果の活かし方や、市町村の姉妹提携の活用、各種制度の活用など、基調報告を札幌市博物館活動センター学芸員古沢氏、事例報告を道立北方民族博物館学芸員中田篤氏、北海道開拓記念館学芸員池田貴夫氏、同手塚薫氏、同出利葉浩司氏により行われ、大変参考となる内容であった。

その後解説を受けながら関連企画展を観覧した。

（広報担当：紋別市立博物館 佐藤和利）

道南ブロック
News

道南ブロック博物館施設等 連絡協議会総会・研修会について

9月13日・14日渡島・檜山管内から17会員が参加し道南ブロック博物館施設等連絡協議会の総会・研修会が函館市中央図書館の大研修室と市立函館博物館で開催しました。

総会では平成18年度の事業び決算が報告され承認されたのち19年度の事業案と会則の一部改正そして役員の変更が行われたが全員留任し、新たに理事を1名選任されました。

平成19年度事業案については、道南ブロックのホームページの開設について協議し、制作については容易ですが、設置する場所やサーバを維持するための経費の問題もあって、今後さらに検討して行くことになりました。また、平成12年度に制作し好評を博していました道南の博物館マップ「ぐるっと道南博物館めぐり」の改訂版制作については、編集委員会を立上げてその中で決めて行くことになりました。早ければ今年度内に発行作業に入る予定になりました。

研修会は、「デジタル・ミュージアムー博物館資料のデジタル化と活用方法」をテーマに行いました。

講師は前函館市中央図書館職員で現在函館マルチメディア推進協議会に所属している田村昌弘さんで「博物館におけるデジタル活用」について1. デジタルおよびインターネット、そして博物館のいま 2. 館運営のなかでのデジタル活用 3. 資料のデジタル化-そのための準備、作業、そして活用・保存 4. デジタルアーカイブの拡がり、膨らみ 5. デジタル活用の課題と今後 という5つのポイントをあげて講義をしたのち教育大学函館校の根本准教授がコーディネーターになりフォーラムディスカッションを行いました。講義の内容が博物館関係者にとって早急に対応しなくてはならない切実な問題になっていることもあり、講師と参加者との間で真摯な質疑応答が繰り返され、今後の博物館活動においてたいへん役立つと思われました。翌日は、市立函館博物館特別展「アイヌからのメッセージ2007-現在から未来へ-」を見学して2日間の研修会が終了しました。

(知内町郷土資料館 学芸員 高橋豊彦)



田村講師

道北3管内
News

北方記念館からの夜景

稚内市北方記念館は、通称、開基百年記念塔ともいい塔最上階に展望室を持つ施設で、市街地後背の稚内半島といわれる丘陵を利用して造られた稚内公園内にあります。

観光地稚内の最近の話題は観光客減少に対し、カニに代わる資源探しの声ばかりです。

観光客の減少は、各施設の入館者数にもはっきりと現われ、サハリンの見える公園として知られる稚内公園の代表的なモニュメントである「氷雪の門」までは多くの観光客の姿を見るのですが、さらに高台にある北方記念館は人影もまばらです。

このような中、夜の観光を振興しようという企画に協力したモニター事業として、通常は訪れる人のほとんど無い午後6時以降の夜間について割引料金による展望室からの夜景観光をホテルなどと共同で行い、有る程度入館者と予想以上に美しいとのアンケート結果を得ました。

平成20年度は開館30年の節目の年でもあり、夜間

開館を行う5月～9月の展望室の無料開放を検討しているところです。

稚内はサハリンとの関係が深いことから、北方記念館2階にサハリンに関する展示があります。

時には問い合わせなどもあるのですが、今年の夏、次のような照会がありました。樺太から引き揚げてきた時は幼い姉妹と母との三大家族だったようで、母親は昭和26年に他界と書かれているので、その後姉妹は樺太と縁のないまま現在に至ったようです。父親は警官で住民を守るために死亡したことが、母から聞いた記憶の中にあるだけで何の遺品も戸籍もないとのことでした。展示物の中に「嗚呼樺太警察最後のとき」と云う冊子があり、この中に父親の手がかりになるようなことが書かれていないだろうかという。

最初から順に読み進めて、何の手がかりもないままに終章まで来てしまったが、この冊子の巻末に樺太警友会作成の樺太庁殉職警察官名簿が付けられており、そこに父親の名前を見つけた。これを基に、本文を読み返し幾つかの状況を知ることが出来たので、早速コピーをとり、樺太連盟の連絡先などを知らせた。

その後、新たな情報が入手できたのだろうかと思っている。

(稚内市教育委員会 内山真澄)

石狩・後志
空知地区
News

H19年度 第2回 研修会 「三笠市の博物館を訪ねて」

平成19年9月28日(金)、三笠市を会場に、恒例となりました石狩・後志・空知地区博物館等連絡協議会の現地研修会を開催しました。今年は空知地区の担当で、三笠市立博物館の長谷川浩二館長と加納学芸員の全面的なご協力で行われました。参加者は6名、少々寂しいのではと心配いたしましたが、それはそれ、楽しい時間となりました。

まずは、加納学芸員のご案内で博物館の展示を見学。専門2名と化石素人4名が、熱心にアンモナイトについてレクチャーを受けました。露出展示で整然と並ぶアンモナイトの前に、山の手博物館の鈴木館長が参加者の核となり、さまざまな質問を投げ掛けてくださり、加納学芸員とのやりとりを聞くことから、さらに多くのことを学ぶ機会となりました。

予備知識を入れた化石採集は、あいにくの天候となりましたが、第1予定地は前日からの雨のため川が増水し危険とのことから第2予定地へと向かいました。こちらは長谷川館長のご案内で、参加者一

同どこに向かうやら…とワクワクしながらハンマー片手に長靴履いて、リュックを背負って三笠市のマイクロバスに乗せてもらって、いざ出陣。大物、小物、それぞれの思惑で採集が行われました。およそ1億年前の遺物に接するうちに段々と目が慣れて、アンモナイト、二枚貝、雲丹、などの化石が次々と現れ、参加者全員が採集に成功しました。



化石採集を終えて一枚！

来夏には、三笠市立博物館と山の手博物館の共同行事も組まれる兆し。地区連絡協議会としては、こういった連携が一番と思っています。少ない人数ながらも、実り多い研修会となりました。

(道央ブロック事務局員 黒川 郁(北海道開拓の村))

日胆地区
News

新ひだか町地域交流センターピュアプラザの 町民ギャラリーにオープンした「うま倶楽部」

平成19年4月25日、新ひだか町の中心商店街のショッピングセンター2階の地域交流センターピュアプラザ内に町民ギャラリー「うま倶楽部」がオープンした。



馬のシルエットと発走ゲートがお出迎え

新ひだか町は、国内屈指の軽種馬の産地で、毎年多くの馬が各地の競馬場でデビューを飾っており、歴史に名を刻んだ名馬も多数輩出している。しかし、町内には、馬に関する歴史や資料などを紹介してい

る場がなく、このような施設の設置が望まれていた。

うま倶楽部は、展示を「馬と人の歴史」、「北海道と馬」、「競馬とサラブレッド」、「馬産地ひだか」と大きく4つのコーナーに区分している。「馬と人の歴史」では、哺乳類としての馬の誕生から世界史上に名を記した騎馬民族モンゴルなどを紹介し、「北海道と馬」では北海道の農林業を担った農用馬について実物資料で展示している。「競馬とサラブレッド」は、町内で生産されたサラブレッドがG1レースなどで優勝したときに贈られたレイ(肩掛け)、カップ、馬服など日頃見ることのできない貴重な資料の展示している、競馬ファン必見のコーナー。「馬産地ひだか」は、馬産地を作り上げてきた新冠牧場などのジオラマや写真などを展示している。その他JRA(日本中央競馬会)オリジナルグッズや新ひだか町の姉妹都市で世界的な馬産地である米国レキシントン市の紹介など合計約700点の資料と写真パネル等約100点が展示されている。

また特別企画として来年3月末まで、日本の馬の郷土民具を展示している。これは、広島県福山市在住の山口良登さんが30年余にわたって全国各地を尋ね歩いて収集した郷土民具約3,000点のうち、馬に関したものの225点をお借りしてきたもの。北は青森から南は沖縄まで、木、土、竹、藁などでできた玩具が目を楽しませてくれる。

(新ひだか町静内郷土館 藪中剛司)


 学芸職員部会
News

平成19年度 学芸職員研修会・部会総会

第30回北海道博物館協会学芸職員研修会が、胆振管内白老町森野において9月27日、28日の2日間にわたって開催されました。研修会の開催に当たり、

テーマの設定から講師、発表者の手配、さらには諸準備にいたるまで地元白老町教育委員会の丁寧な対応と日胆地区博物館等連絡協議会（会長長谷川 充氏）の多大なるご協力がありました。なお、本研修会は日胆地区博物館等連絡協議会の研修会と兼ねて開催しました。

「地域学のススメ」というテーマは、平成9年函館市の開催からで、地域に役立つ博物館と博物館活動を具現化したいとの思いから継続しています。開催地区の学芸員や在野の研究者並びに地域で実践活動を行っている人たちによる研究実践報告、活動事例報告などの発表の機会を設け、その地域の博物誌という形ですすめてまいりました。そのことから、今回のテーマは「地域学のススメー博物館事業・活動におけるアイヌ文化の導入ー」とし5名の方によってそれぞれの施設や地域での事例を報告していただきました。事例報告に先立ち、JRA日高育成牧場場長の朝井 洋さんによる「胆振・日高の馬ー馬という動物在来種からディープインパクトまでー」と題した基調講演がありました。「現在、日本馬事協会により北海道和種馬、木曾馬、トカラ馬、宮古馬などを含めて8種が日本在来馬として認定され、その飼養頭数は合計2千頭余でしかないという。そのうち、北海道和種馬（ドサンコ）は全体の7割を占めている。明治中期から昭和初期にかけては、日本では140～150万頭もの馬が飼養されていたが現在では10万頭にも満たず、その半数は競走用馬である」。朝井さんは、京都大学農学部畜産学科を卒業され、すぐに中央競馬会に入会し現在にいたっております。専門分野は馬の栄養、飼育学で、永年にわたって蓄積されてきたデータに基づくお話はとても興味深く、新鮮なものでした。「ディープインパクトはなぜ速い、なぜ強い・・・そしてディープインパクトは本当に空を飛ぶのか？」平成17年度菊花賞ー京都競馬場ゴール手前100m地点での高速度ビデオによる動作解析では、たしかに飛んだ・・・ように見えました。後で、馬券必勝法をそつと聞いたところ「ありません」、とのことでした。

基調講演後、苫小牧駒澤大学教授岡田路明さん「苫小牧駒澤大学におけるアイヌ文化への取り組み」、

平取町立二風谷アイヌ文化博物館長田佳宏さん「平取町立二風谷アイヌ文化博物館での取り組み」、帯広百年記念館内田祐一さん「帯広百年記念館アイヌ民族文化情報センター「ニウカ」の活動について」、知里真志保を語る会小坂博宣さん「知里真志保を語る会とウタリ協会登別支部の活動」など5つの事例について優れた活動実践の報告がなされました。

翌28日は、ポロトネイチャーガイドめむの会のみなさんの案内で森野の産業遺跡を探訪しました。前日の雨で一部小川状態になっている山道を、左右に激しく揺られながら、バスはひたすら登りつめてゆく、そのような行軍となりました。目的地に着く前にバスのほうがダウン、ブッシュをかき分けついたらところが、かつて硫黄を採掘していた場所でした。

地域の人たちとともに活動する博物館、地域のことをしっかりと調べ、情報を蓄積し発信する姿を実感した研修会となりました。白老町教育委員会、日胆日胆地区博物館等連絡協議会、そして白老町のみなさんに心より感謝申し上げます。閉会式後、参加者全員に手渡された白老牛ハンバーガーは、心温まるおもてなしの表れでした。

部会総会報告

1日目の研修会終了後、同じ会場で部会総会が開催されました。議長に室蘭工業大学の久末進一さんを選出し、用意した5つの議案について提案、説明を行いました。その結果、平成18年度事業報告、収支決算報告は原案通り了承、平成19年度事業計画と収支予算案につきましても原案通り了承されました。役員改選では、部会長西谷榮治、副部会長武永真・高橋豊彦、事務局長中岡利泰、幹事舟山直治・佐藤一志・戸田恭司・澤田健・巖中剛史・半井仁・宮原浩・佐藤卓司、監事中島一之の各氏が選出されました。部会長と副部会長は北海道博物館協会の理事をも兼ねることになります。平成20年度の学芸職員研修会は道南の知内町にて開催いたします。開催時期、テーマにつきましては今後道南地区博物館等連絡協議会のご協力を得て決定することになります。総会参加者から、会費の徴収を積極的に、研修会案内は道博協加盟館園すべてにというご意見が寄せられました。また、改訂版「北海道博物館ガイド」の発行について新体制で検討することになりました。

最後になりましたが、長くやっていると必ず起こりうる「弊害」に耐えてくださった会員の心温まるご配慮に感謝申し上げます。ありがとうございました。

（学芸職員部会 矢吹 俊男）

動物園・水族館
News

「自然の再現」を テーマにした施設の改修について

昨年の春、おたる水族館では「自然の再現」をテーマに掲げ、全国の水族館の中で当館のみが飼育するネズミイルカの展示施設を改修してゴマファザラシとの同居に切り替え、プール名も「ほのぼのプール」と改名しました。

両種を同じ水槽内で飼育することにしたのは、沿岸域に生息するゴマファザラシと比較的沖合に生息するネズミイルカとの違いはありますが、共に北海道周辺からオホーツク海・ベーリング海を生活圏にしていることから、自然界において出会う機会も多いだろうと考えたからです。

既存のネズミイルカの飼育プールは直径12m、水深3m、水量約300㎡で、スロープと階段を降りた地下1階にはアクリルガラスの観覧部があり、水中の様子も観覧できる仕様になっています。

この度の改修工事は、①プール内にアザラシが上陸する丘部を設ける。②アザラシが岩穴から顔を出すスペースとして丘部に一カ所、自然風の丸穴を設ける。③プール周囲の手摺りをコンクリート製のか

まぼこ型とする、の三点としました。

一年以上が経過しましたが、ネズミイルカとゴマファザラシは争うこともなく、それぞれプール名に相応しい間柄になっている感があります。そして何よりも喜ばしいのは観客の皆さんの滞在時間が長くなったことです。つまり、岩穴から顔を出すアザラシのシャッターチャンスを狙ったり、かまぼこ型の手摺りに両肘をつけて顎をのせ、じっくりと動物と対話する光景を多く眼にします。

当館がテーマとして取り組んだ「自然の再現」は、観客の心に一層の潤いと安らぎを与えてくれているようです。そしてまた、自然やそこに棲む生きものたちへの興味関心を持っていただくための一歩になることを切望しています。

(小樽水族館 館長 小田 誠)



観客で賑わう「ほのぼのプール」

科学館
News

旭川市科学館「サイバル」の紹介

地球環境保全等の課題への対応に向けて各科学分野の横断的な連携が求められる中、科学館も今まで以上に幅広い役割を担う必要があります。

旭川市科学館の前身である旭川市青少年科学館では、主に物理、化学、天文など理工系分野の展示や普及活動を行ってきましたが、平成17年7月の現科学館開館を機に、生物・地学も含む自然科学全般に活動の対象を広げました。

理科や科学は本来とても楽しく面白いもので、それを多くの人々に伝え、興味や関心を持ってもらうことが、科学館の重要な役割です。

当科学館の常設展示も、見る、触る、操作する、乗るなどの体験性を高める工夫をしています。

宇宙空間の無重力状態を体験できる「宇宙ゴマ」や、マイナス30度の室内で色々な実験を楽しむ「低温実験室」などは、特に人気があります。

「人類の進化」という展示は、鏡に映った自分の姿が猿人や原人に変化するという地元の大学生の提案を具体化したもので、モーション・キャプチャーという技術

によって、4種の化石人類のCGが体験者に同調して動く、全国でも初めてのまったく新しい展示となりました。

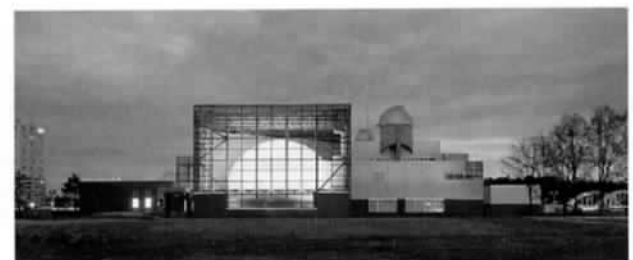
プラネタリウムは、光ファイバーを使ったシステムにより星が本物のようにまたたく、カールツァイス社の最新機種を導入し、アメリカ自然史博物館制作の全天周映像も上映しています。

天文台には口径65cmの反射望遠鏡を設置し、昼間も月や惑星、明るい星などを観測できます。

運営をお手伝いいただいている「サイエンスボランティア旭川」には約200名の会員が参加し、展示案内説明や実験実習指導に従事しています。

当科学館では、今年8月に100万人目の入館者を迎えました。今後も、科学の楽しさを感じていただけるような施設運営に努めてまいります。

(旭川市科学館長 佐々木恵一)



夕暮れの旭川市科学館「サイバル」

美術館
News

「Born in HOKKAIDO 大地に実る、人とアート」

北海道立近代美術館は、11月1日(木)から1月24日(木)まで、「Born in HOKKAIDO 大地に実る、人とアート」展を開催する。この展覧会は、当館の開館30周年企画の一環として常設展で開催する「コレクション物語1977-2007第三章 北海道の美術」と事実上連動するものである。約250年におよぶ北海道の代表作を振り返るといふ常設展に対し、本展では北海道出身の中堅・若手アーティスト16人の作品に加え、市内小中学校8校と連携授業を展開し制作された子どもたちの作品によって、北海道美術の現在をみつめ、未来を展望しようとする試みである。

展覧会の構成としては、まず「感覚の実り」と題し、繊細で鋭敏な感覚によって、自然や不可視の世界をも体感的に造形化した作品にはじまり、「想像の実り」では、豊かな想像力によって、ファンタジックな物語性や詩的情感、宗教的精神性などをたたえる作品、「対話の実り」では、自己のアイデンティティに立脚しつつも、ひらかれた対話力によって、外界

のさまざまな存在や事象としなやかに感応し、新鮮な表現をもつ作品を紹介する。いずれも表現手段としては油彩、日本画、版画、ガラス、彫刻、映像など多岐にわたったインスタレーションとなり、本道にゆかりのあるアーティストらの、極めて豊かな表現力が一望して感じ取られる展示空間となろう。

そして最後に「実りゆく未来」とし、この地で育ち未来をになう小中学生が、北海道という風土や美術からインスピレーションを得て創造した作品、出品作家とのワークショップで創造した作品を紹介する。自らを育んだ風土に根ざし、それぞれのリアリティを模索しながら生きているアーティストたちの創造的営みを見つめることで、北海道という風土と、そこに育まれる人間の創造性との関係をとらえ直そうという試みの展覧会である。美術と風土という語りつくされた感のあるテーマを、今一度現代という時代のなかで考えていただく機会となれば幸いである。

(北海道立近代美術館 主任学芸員 久米淳之)



池田光弘「untitled」
2005年「高橋コレクション」

館園の主な展覧会と 普及事業

(2007年11月～3月)

- 石狩**
札幌市円山動物園 (011-621-1426)
12月 干支の特別展示
1/19～2/3 動物のウンチをくらべてみよう
2/3～2/11 円山動物園スノーフェスティバル
北海道立三好好太郎美術館 (011-644-8901)
1/25～3/27 展覧会「三好好太郎をめぐる人間模様」
- 札幌芸術の森美術館 (011-591-0090)
12/1～1/28 収蔵品企画展「愛する美術(仮)」
北海道立近代美術館 (011-644-6881)
2/1～2/10 特別展 日本建築家協会北海道支部 建築展『ココで暮らす。ココロで暮らす』
2/19～3/23 特別展「吉村作治の早大エジプト発掘10年展」
- 札幌市豊平川さけ科学館 (011-582-7555)
冬期2回 サケ皮で靴づくり
- 渡島**
七飯町歴史館 (0138-66-2181)
11/24～1/27 企画展「昔の道具あれこれ」

事務局からのお知らせ

第46回大会の記録集が完成しています。入手を希望される会員は、事務局(庶務担当:寺林伸明)までご一報ください。連絡先は、電話:011-898-0456、FAX:011-898-2657(いずれも穂開拓記念館と共通)、あるいはE-mail:terabayashinobuaki@pref.hokkaido.lg.jp

3/1～3/25 パネル展『タイトルのないはっぴょうかい4』

北海道立函館美術館 (0138-56-6311)
12/15～3/23 特別展「鎌田俳捺子展」
12/15～3/23 「アートにみるタイポグラフィ」
「中島荘牛の世界」吉祥のイメージ

後志
北一ツエネツイ美術館 (0134-33-1717)
11/17～2/22 特別展「ゴッホ・ガラスモザイク絵画展」
2/23～5月末 特別展「ムラノガラス大復刻作品展」
小樽市水族館公社 (0134-33-1400)
9月以降の土、日、祝日 一般対象のバックヤードツアー

空知
滝川美術自然史館 (0125-23-0502)
12/1～1/14 展覧会「子どもArt展」
2/2～2/24 展覧会「とまれ!地球温暖化
たきかわが再び海になってしまう日」

上川
旭川市科学館 (0166-31-3186)
11月上旬～2月下旬 科学教室
「科学館クラブ初級コース」
11月上旬～2月下旬 科学教室「親と子の実験室」
旭川市博物館 (0166-69-2004)
2/24～3/20 企画展「黒曜石の魅力に迫る」
中原偉二郎記念旭川市彫刻美術館
(0166-52-0033)

1/19～3/30 企画展「まちなみ彫刻写真展2007」
中川町エコミュージアムセンター (01656-8-5133)
2/21～2/24 森の学校2008冬
名寄市北国博物館 (01654-3-2575)
1月下旬 雪あかりコンサート
北海道立旭川美術館 (0166-25-2577)
1/16～2/17 特別展「アール・ブリュット・コレクション
と日本のアウトサイダー・アート」

網走
美幌博物館 (01527-2-2160)
12/9～1/27 企画展「寄贈美術資料展」

2/10～3/9 企画展「冬季作品展」
紋別市立博物館 (0158-23-4236)
2/2～3/2 写真展「オホーツク紋別の冬」
3/15～3/30 第4回「博物館サークル活動作品展」

博物館網走監獄 (0152-45-2411)
1/1 体験講座「絵馬づくり」
1/20 体験講座「手織り体験」
北海道立北方民族博物館 (0152-45-3888)
2/3～3/23 企画展「森の人ウデヘ:ウスリ
タイガに暮らす」
上湧別町ふるさと館 J R Y (01586-2-3000)
2月 「収蔵資料紹介展」

胆振
苫小牧市博物館 (0144-35-2550)
2/9～3/16 第19回企画展「冬を生き抜く
～森と市街地の動物たち～」

十勝
おびひろ動物園 (0155-24-2437)
1/25～1/27 ふゆの動物園
神田日勝記念美術館 (0156-66-1555)
12/4～12/16 展覧会「野村たかあき絵本原画展」
北海道立帯広美術館 (0155-22-6963)
11/22～3/26 「アートな動物園」
2/8～3/26 「バリそぞろ歩き」

釧路
標茶町郷土館 (01548-7-2332)
12月～2月(予) 新登録資料移動展
厚岸町海事記念館 (0153-52-4040)
2月上旬～3月下旬 特別展(タイトル未定)
北海道立釧路芸術館 (0154-23-2381)
2/2～3/30 展覧会「コレクション・ギャラリー」
12/26～1/20 冬のキッズ・アトリエ

根室
根室市歴史と自然の資料館 (0153-25-3661)
2/22 学芸員講演会